台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 115-134
2009-10-30 收稿，2010-01-06 通過刊登

中日身體語彙之語義延伸
－以複合名詞「～口」為例－

蔡豐琪*

摘要

受到人類長期從日常生活中的身體體驗（例如人有一個口，口腔裏還包括牙齒和舌頭，靠著牙齒和舌頭來攝取食物，並品嘗食物的味道等經驗）所獲得的認知概念、以及傳統社会文化的影響之下，身體語彙產生了許多衍生語義，使得身體語彙大多形成了一詞多義之「多義現象」。以日語爲例，身體詞「口」從原本單純表達身體器官「mouth」之基本語義，大量衍生出像「窓口」、「秋の口」、「就職口」、「一口千円の寄付」等等不是表達人體「口腔部位」意思的衍生語義。爲了要理解這些衍生語義和基本語義之間，在認知語義上的關連性和語義延伸的方法，便成爲筆者此次研究的動機。

本論文採用認知語義學的觀點，以日語和漢語的身體詞「～口」和〈～口（kou）〉作爲研究對象，首先從中日兩國辭典中收集含有「～口」的複合名詞作爲主要的分析語料，接著再以語料庫、新聞資料庫中收集日常生活中之實際用例做爲補充。然後用共時的觀點，去了解身體詞「～口」的實際使用分佈以及所涵蓋的語義範疇。之後參考歷時的觀點，依據基本語義和衍生語義之間的「相似性」、「隣接性」、「包摂性」等語義關係特徵，試圖以「隱喻、換喻、提喻」等認知譬喻的概念，來解釋語義延伸的現象。最後將中日身體詞「～口」和〈～口（kou）〉的多義構造，用語義網絡圖加以歸納，並檢討兩者之間的差異。

關鍵詞：多義表現、語義延伸、隱喻、換喻、語義網絡圖

* 銘傳大學應日系助理教授

Semantics Extension of Vocabularies Related to Body Parts in Chinese and Japanese Languages —an example of a compound noun: 「～口」—

Tsai, Fong-chi*

Abstract

Through the influences of one's daily practice as well as culture background, these vocabularies have also been developed into other forms of meanings. This has resulted in polysemy of the body related words.An example in Japanese language is the character of 「口」, which initially represents "mouth" of human beings. Nevertheless, it is also extended and used in various terms with different interpretations. The words of 「窓口」、「秋の口」、「就職口」、「一口千円の寄付」which are irrelevant to "mouth," are examples of the transformation.

Based on the concept of cognitive semantics, the study firstly collects the terms containing 「～口」 from both Chinese and Japanese dictionaries as samples, with supplements of other terms from corpus. with the references of similarity, contiguity, and hyponymy between the basic and the extended meanings of the terms, the paper then explains the phenomenon of semantic extension through metaphor, metonymy, and synecdoche. The structure of the multiple presentations of「～口」 in both Chinese and Japanese languages and their differences are finally presented and categorized in a semantic network graph.

Keywords: multiple presentation, semantic extension, metaphor, metonymy, and semantic network.

* Assistant Professor, Department of Applied Japanese, MCU

日中身体語彙の意味拡張
－複合名詞「～口」を中心に－

蔡豐琪*

要旨

身体語彙は人間の日常生活の身体体験（例えば、人間には一つの口を持ち、口腔には歯や舌があり、口で摂食したり、味わったりする経験)から得た認知的な概念､及び伝統的な社会文化に影響され、多くの派生義が発生され、「多義表現」になる。日本語の例を挙げると、本来身体器官「mouth」を表現する単純な身体部位語「口」の基本義から、「窓口」、「秋の口」、「就職口」、「一口千円の寄付」のような非身体表現の派生義が多く派生された。これらの表現の間にどのような意味関係を持っているのか、どのように意味拡張するのかを究明するのが本論を研究するきっかけとなった。

本論は、認知意味論の観点で、日中身体部位語「～口」と〈～口（kou)〉を研究対象とする。まず日中両言語の辞典を中心として「～口」を含んだ複合名詞の用例を収集する外に、コーパスで検索して用例を補足する。次に共時的な観点から実際の使用分布を観察し、その違った用例を比較する。次に、基本義と派生義との間の「類似性」、「隣接性」、「包摂性」などの認知的な意味関係を観察しながら、「メタファー、メトニミー、シネクドキーなどによる意味拡張」という概念で、多義表現を解釈する。最後に身体部位語「～口」と〈～口（kou）〉の多義構造を意味ネットワーク図でまとめ、その図を対照比較し、相違点を検討する。

キーワード：多義表現、意味拡張、メタファー、メトニミー、意味ネットワーク

* 銘傳大學應日系助理教授

日中身体語彙の意味拡張
－複合名詞「～口」を中心に－

蔡豐琪

一、はじめに

（一）研究動機

身体語彙は人間の身体部位名称を表現し、我々にとって最も親しい語彙であり、人間の日常生活の身体経験（例えば、人間には一つの口を持ち、口で食物を摂取し、発話する。そして口腔には歯や舌があり、食物を咀嚼したり、味わったりする）から得た認知的な概念、及び伝統的な社会文化に影響され、多くの派生義が発生され、「多義表現（polysemy)」になる（国広 1994：22-44)。日本語の例を挙げると、身体部位語「口」を使う表現には、本来身体器官「mouth」を表現する単純な「口」の基本義から、「窓口」、「非常口」、「秋の口」、「就職口」、「一口千円の寄付」のような非身体器官を表現する派生義も多く派生された。これらの表現の間にどのような意味関係を持っているのか、どのように意味拡張するのかを究明するのが本論を研究するきっかけとなった。

（二）先行研究

身体部位語「口」の多義構造に対して、それを検討する日本語の著書では、森田（1994：P384-P385）が「口」の多義用法に触れている。用例を挙げながら、多くの用法を解釈したが、用法の解釈項目が羅列しているのみで、「口」の基本義と多くの派生義との意味的な繋がりが検討されていなく、基本義からどのように多くの派生義に意味拡張されたのかは言及されていない。赤祖父（2000：P605-P607）が社会言語学の観点で「口」に関する日本語、中国語、英語の比喩表現に少し触れ、身体部位語「口」に対する汎言語的なイメージを検討している。赤祖父は「日本語、中国語、英語の比喩表現は似通っているが、日･中ではおしゃべりに関するものが目立つ」と述べて

いる。そのほかに、認知意味論の観点で、最近英語語彙の多義構造に対する意味拡張の分析成果を取り入れた英和辞典（瀬戸 2007：P619、田中 2006：P1071-P1072、小西ら 2006：1271 など）が編纂されたが、分析対象は英語語彙なので、認知意味論の観点で日本語の身体部位語「口」の多義構造を全面的に分析する著書はまだ見かけない。紀要論文では、田中（2002：P05-P20）の論文が身体部位語「口」を含む慣用的な表現を取り上げ、包括的な記述を試み、慣用表現の有契性や体系性を明らかにする。有薗（2005：P487-P497）が身体部位「手」、「口」を含む慣用表現の意味分類を僅かに検討している。ラダンポー（2008：P12－P22）が日本語とタイ語の対照比較を通して、慣用表現を語例として、身体部位「口」の意味拡張を検討している。いずれも認知意味論の観点で、身体部位語「口」の多義構造を究明する小論文である。分析対象は語彙よりも構成単位が大きい、意味合いが複雑な慣用句[1]を選んでいるが、筆者の観察では複合名詞の形で表現する身体部位語「～口」も多くの派生義が生じている。しかも複合名詞「～口」の多義構造は「口」を含む慣用句の多義構造とは随分違うので、複合名詞「～口」の多義構造が検討されなければ、それが身体部位語「口」の多義構造の全貌にどのように反映しているかを明らかにすることができない。それゆえ、筆者は複合名詞「～口」の多義構造を検討する必要性があると考える[2]。

それに対して、身体部位語〈口（kou)〉の多義表現を検討する中国語の著書では、古（2000：P128-P145)、曹（2001：P16-P30）などがあるが、「口」の実際の使用分布を概略的に紹介している。紀要論

[1] 例えば、複合名詞に似た諺「口弁慶」のような構成要素に直接に意味を分析することが難しく、「弁慶」という歴史上の人物（百科事典的知識）を理解しておかないと、「口弁慶」の「口は達者だ」という意味を理解することができない。さらに語用論的推論を使わないと、「口は達者だが弱虫なこと」という発話の意図を把握することができない。それゆえ、慣用句や諺には複雑な意味合いがあるので、メタファーなどによる語彙の意味拡張を中心に分析する本論では観察の対象外とする。

[2] 瀬戸（2007：P03-P11）が「一般の辞書は多義語の意義をばらして個々に記述するが、各意義の関連についてはほとんど何も触れない。その結果、1 語の中の複数の意義は意味の関連性を失い、あたかも同音異義語のように狭い空間にひしめき合うことになる」と指摘したように、現在の辞書は基本義と派生義の意味的なつながりを言及していないのに対して、多義語の各意義の関連性を明示し、かつ全体的な意味ネットワークを提示することによって、多義語の全貌を明らかにすることは語彙研究の大きな課題だと考えられる。

文では、最近認知意味論の観点で〈口（kou)〉のメタファーなどによる意味拡張を検討する小論文（史 1994：P011-P014、許 2007：P33-P37、呉 2008：P10-P13 など）が少し増えてきたが、いずれも 4～5 ページの紙幅で概略に触れた小論文が大多数なので、意味拡張のパターンや意味ネットワークに注目して、深く分析する論文が十分に行われたとは言いがたい。それゆえ、身体部位語〈口（kou)〉の多義構造を究明する余地が考えられる。

（三）研究範囲と研究方法

認知意味論（cognitive semantics）の観点では、多義語（polysemy）の形成はメタファーなどにより、基本義から派生義へ意味拡張した結果である。本論も認知意味論のアプローチを取り入れ、身体部位語「口」の多義構造というカテゴリーの形成は「人間の口を表す」単純な基本義から多くの派生義へ意味拡張した結果だと理解し、籾山（2002：P100-P117）が立てた「多義語分析の課題（1.複数の意味の認定。2.プロトタイプ的意味の認定。3.複数の意味の相互関係）」に従い、今回の分析要項にする。

研究範囲は日本語の身体部位語「～口」の複合名詞と中国語の身体部位語〈～口（kou)〉の複合名詞を中心として分析する[3]。単純語「口」よりも複合名詞「～口」は使用範囲が広く、派生語も多く生じたので、多義表現の意味拡張（semantic extension）を観察する本論では、複合名詞「～口」と〈～口（kou)〉を選んで分析する。一方、身体部位語「口」の表現と言っても、「窓口」、「甘口」のような複合名詞のほかに、「口車に乗る」、「口が減らない」、「口がうまい」、「口が軽い」のような慣用句（idiom）や、「口も八丁手も八丁」、「口

[3] 田中（2002：P05-P20）の分析によれば、従来、慣用句ないし成句と呼ばれるものは、その意味が構成要素の意味から予測しにくいことから、言語研究の対象となりにくい傾向があったが、認知言語学では、言語を現実世界の反映としてではなく、人間がそれをいかに認知し解釈しているかを反映するものと捉える。この観点から見れば、通常の言語表現もいわゆる慣用句の意味も、現実に対する我々の捉え方・解釈の反映として連続的に捉えられる。慣用表現の多くは、構成語の意味からある程度の動機づけが可能である。本論もこの観点を賛成するが、先行研究の研究対象は全部慣用句だけを検討し、逆により基本的な複合名詞「～口」の多義構造が検討されなければ、多義構造の全貌を明らかにすることができない。それを補足するため、本研究では複合名詞「～口」の多義構造を分析する。

は禍の門」のような諺などもあるが、慣用句（idiom）や諺は複雑な意味合いを持ち、しかも語彙レベルの表現ではないので、今回の観察対象から排除し、今後の研究課題とする。

研究方法は、まず日中両言語の辞典を中心として用例を収集しながら、コーパス（corpus）や各新聞社の記事コーパスを検索して、日常生活の実際使用例を加えて補足する[4]。次に共時的（synchronic）な観点で実際の使用分布を観察し、その違った用法を比較して分類してみる。引き続いて、通時的（diachronic）な観点で、基本義と派生義との間の「類似性（similarity）」、「隣接性（contiguity）」、「包摂性（hyponymy）」の認知的な意味関係を観察しながら、「メタファー、メトニミー、シネクドキーなどによる意味拡張（semantic extension）」という概念で、多義表現を解釈する[5]。最後に日中両言語の身体部位語「～口」と〈～口（kou）〉の多義構造を意味ネットワーク（semantic network）図[6]でまとめ、その図を対照比較し、日中両言語の意味拡張の相違点を検討する。

二、多義構造の形成に対する認知意味論の考え

認知意味論では、多義構造の形成はメタファーなどにより、基本義から派生義へ意味拡張した結果である。本論も身体部位語「口」の多義構造というカテゴリーの形成は、認知的な比喩により、「人間の口」を表す単純な基本義から多くの派生義へ意味拡張した結果だと理解し、籾山（2002：P062-P085）の分類に従い、認知的な比喩を

[4] 本論で使用した辞典用例の出典、コーパスは論文最後の「用例の出典」に掲載する。コーパスの検索期間は 2009 年 8 月 28 日から 31 日までである。国立国語研究所編集の『辞書を知る』（2009：100-103）の紹介によれば、現在の学習辞書編纂、用例収集にはコーパスを利用して用例を補足する傾向は見られる。

[5] 意味拡張の普遍プロセスについては、Heine et al (1991)が「PERSON > OBJECT > PROCESS > SPACE >TIME > QUALITY」というプロセスを説明した。そのプロセスを検証した李（2002）の研究によれば、言語により、その意味拡張のプロセスが若干違うが、Heine et al (1991)が立てたプロセスは参考になる。本論もこの意味拡張のプロセスの概念を参考しながら、身体語彙「口」の意味拡張を順次に検討する。

[6] 国立国語研究所編集の『辞書を知る』（2009：100-103）の紹介によれば、現在の学習辞書編纂には単語の多義表現の究明も注目され、基本義と多くの派生義との意味的なつながりを認知意味論の観点で解釈する意味ネットワークを導入する英和辞典が出てきた。本論も認知意味論の分析方法を使い、身体語彙「口」の多義構造を究明する方針である。

メタファー（metaphor）、メトニミー（metonymy）、シネクドキー（synecdoche）の三種類に分け、検討する。

まず、（1）メタファーは二つの事物・概念の何らかの類似性（similarity）に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩である（籾山 2002：P65）。例えば、我々は「マウス」と言えば、まず「鼠」を思い出すが、形が小さくて、机の上で「ねずみ」のように動いているという類似性から「コンピューターの入力装置」をも「マウス」と呼ぶ。つまり、基本義である「鼠」からメタファーによって、派生義である「コンピューターの入力装置」まで意味拡張された結果である。

次に、（2）メトニミーは二つの事物の外界における隣接性（contiguity）、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩である（籾山 2002：P76）。例えば、直接「小便する」と言うことを避けるため、時間的な隣接性による小便前の行為である「トイレに行く」、又は小便後の行為である「お手洗いする」に換えて表現できる。

最後に、（3）シネクドキーは、より大きなカテゴリー（類）とより小さなカテゴリー（種）との間の包摂関係（hyponymy）に基づく意味的伸縮現象である（瀬戸 2005:129）。例えば、「類で種」を表すタイプの代表例は、「花見」の「花」は「桜」を意味する。「花」は類（より大きなカテゴリー）の名前であり、「桜」は種（より小さなカテゴリー）の名前である（瀬戸 2005:129）。

三、類似性によるメタファーでの意味拡張

今回の観察では、シネクドキーによる意味拡張の用例が見られなかったので、本論ではメタファー、メトニミーの意味拡張を軸に検討する。本節では先に基本義「口」から類似性によるメタファーで意味拡張される多義構造を検討する。そして、瀬戸（2007：P03－P11）の下位分類に従い、類似性のタイプをさらに「形態の類似性」、

「特性の類似性」、「機能の類似性」の三種類に分けて、類似性によるメタファーの意味拡張を観察しようと思う。

（一）「人間の口」を表す基本義

東漢許慎『説文解字』によれば、漢字「口」に対する解釈は「口，人所以言食也。象形。凡口之屬皆從口。」であり、その意味は「口は言葉を発し、食べ物を摂食する器官である」である[7]。漢字「口」は元々「」であり、直接人間の口の形を描いて表現することから、「人間の口」を表すのは、身体部位語「口」の基本義である。

口は消化系統の最前端であり、食物を取り入れる部分である。口腔で食物を分断し、食物を把持し、取り込むための構造が備わっていると同時に、鼻腔と並んで呼吸器の末端ともなっているので、発声や味覚、呼吸等様々な行動を補助する器官となっている。即ち、「口」のプロトタイプ（prototype）は人間の「mouth」に当たる身体部位であり、「消化系統の最前端である容器の形態」、「食べ物を摂取する機能」、及び「発話で意思伝達する機能」などは人間「口」の大きな意味特徴である。

（1）日本語：おちょぼ口。大口。

（2）中国語：樱桃小口。血盆大口。

（二）「動物の口」を表す派生義

生物によって、摂食するための口の構造や付属器官は様々であるが、動物、鳥類及び魚類の口は人間の口の形態によく似ている。しかし、魚類は口が発声できないし、また動物、鳥類（くちばし）は口腔の構造や口の筋肉の違いにより、人間のように発声できても、言葉で意見を交換することができない。それは人間と動物との最も大きな違いである。それから、人間は食べ物を摂取するため、大多数の動物の口には舌や歯などの付属器官を備え、唇の開閉による食べ物の取り入れ、歯や口ばしによる咀嚼で食べ物を分断し、摂食する。それゆえ、口の「消化系統の最前端である容器の形態」と「食

[7] 『説文解字』のオンライン版を参照した。
http://shuowen.chinese99.com/index.php?action=displaychar&num=779

べ物を摂取する機能」などの特徴に注目して、形態と機能の類似性によるメタファーで、「動物の口を表す」派生義が意味拡張した。

（3）日本語：虎口。鶏口。

（4）中国語：羊入虎口。寧為雞口。

（三）「容器の開口に当てる部位」を表す派生義

〈病從口入，禍從口出〉、〈守口如瓶〉、〈出口成章〉などの中国語表現から、我々は人間の口腔を一つの容器として認識することが分かった。食べ物を摂食するため、まず「食べ物を口に取り入れる」ので、「物を取り入れる」容器の機能に似ている。それゆえ、「容器の開口部位を表す」形態の類似性と「物を取り入れる」特性の類似性によるメタファーで、「容器の開口に当てる部位を表す」派生義が生じた[8]。この派生義をさらに下位分類して、唇のように開閉できる容器の開口部位を指す表現（例5、例6）もあるが、開閉できない容器の開口部位を指す表現（例7、例8）もある。例えば、貝の貝殻が食べ物を摂食する器官ではないが、口のように開閉するので、貝殻を開くことを「貝が口を開く」で表現することができる。「貝が口を開く」の「口」は貝殻の開口部位を指す派生義である。また日本語には「鯉口」があって、これは楕円形の形に開いているものや刀の鞘口を指す表現であり、「鯉口」が開閉できないが、「刀を取り入れる」容器の機能を持っている[9]。

（5）日本語：蛇口。瓶の口。釜口。

（6）中国語：自來水口。瓶口。窯口。

（7）日本語：砲口。銃口。飲み口。鯉口。

（8）中国語：砲口。槍口。碗口。

（四）「物体の凹んだ、破損した所」を表す派生義

口は消化系統の最前端であり、口から喉頭までの口腔の部分は一つの容器と意識され、山の洞窟、地上の穴などの空洞は口腔の形態

[8] 人間の内臓も一つの容器として認識し、中国語の〈心口〉、〈胃口〉、〈胸口〉、などの表現が生じ、抽象的な意味を表す。

[9] 刀の鍔を親指で押すことにより「はばき」を外し、鞘より刀を抜くための動作を意味する「鯉口を切る」と用いる。

に似ているゆえ、口の「容器の形態」という特徴に注目して、形態の類似性によるメタファーで、「物体の凹んだ所」（例 9、例 10）、又は「破損した所」（例 11、例 12）もよく「～口」を使って表現する。

（9） 日本語：坑口。火口。袖口。噴火口。

（10）中国語：坑口。火山口。袖口。

（11）日本語：傷口。切れ口。

（12）中国語：傷口。缺口。

（五）「人や物が出入る場所」を表す派生義

口は消化系統の最前端であり、口腔から肛門までの消化管は「消化するため食べ物を通り抜ける通路」とも考えられ、口腔は食べ物を取り入れる「容器の開口部位」とも言えるので、三·三節の「容器の開口部位」という意味拡張が見られる。しかし、口は摂食する器官だけではなく、発話したり、呼吸をしたりするので、口は食べ物の入り口であり、声や息の出口でもある。それゆえ、口はいろいろなものが出たり入ったりするところである。もし三·三節の派生義を場所にマッピング（mapping）したら、さらに「人なみ、物の出入る場所」を表す派生義が生まれる。例えば、「谷口」、「河口」などの表現は「蛇口」、「銃口」などのような具体的な容器の形態を持たないが、容器特性の類似性によるメタファーで、「人や物が出入る場所」を表す派生義が生じた[10]。

（13）日本語：門口。改札口。谷口。河口。港口。昇降口。水口。

（14）中国語：門口。剪票口。谷口。河口。港口。廟口。

（六）「通路などの端」を表す派生義

我々の消化管を一つの通路として認識するゆえ、口と肛門はまるで一連の消化器官からなった通路の両端のようである。空間位置の類似性によるメタファーで、「人なみ、物の出入る場所」というイメージをさらに「通路の端」に喩える意味拡張が生じた。例えば、山を登る人にとっては、山頂へ行く「通路の端」を「登り口」と呼び、

[10] 例えば、中国万里の長城の所々に設置された関所も〈～口〉で呼ばれる。今でも〈張家口〉、〈喜峰口〉、〈古北口〉などの地名に残っている。

山を降りる人にとっては、「通路の端」を「降り口」と呼ぶので、厳密に言うと、「登り口」も「降り口」も「登山通路の両端」であり、「出入り口」に交替可能である。また、抽象的な物流のルートを物理的な通路に喩えたら、「～口」で表現することができる。例えば、日本語の「窓口」は利用者との応対・事務処理をする所を表し、取引相手機関である中国語の〈窗口〉、〈對口〉の表現に似ている。

（15）日本語：出入り口。登り口。上がり口。降り口。窓口。

（16）中国語：出入口。登山口。吊橋口。渡船口。窗口。對口。

（七）「空間配列順序の始まり」を表す派生義

人間は摂食するという身体的経験を考えたら、まず口から食べ物を取りいれ、消化管を通過し、消化してから、最後に排泄物として肛門から排出されるというプロセスになる。そのプロセスによれば、口腔は消化通路の最前端の位置にあると理解できる。即ち、口を通路の端に喩える派生義から、空間位置の類似性によるメタファーで、さらに空間配列順序の「始まり」という派生義が生じた。例えば、例（17）の「入り口」が空間配列順序の始まりであり、「攻め口」は攻め入る場所を表す空間配列順序の始まりである、また例（17）の「口絵」は書物・雑誌の初めの部分に載せる絵を表し、空間配列順序の始まりというイメージから発想された表現だと思う。

（17）日本語：入り口。乗車口。搭乗口。攻め口。口絵。

（18）中国語：入口。登機口。

（八）「時間配列順序の始まり」を表す派生義

人間の消化活動のプロセスにおいては、口腔は消化通路の最前端の位置にあるだけではなく、消化する時間を考えても、口腔も他の消化器官より早く消化活動を行う器官だと認知され、空間配列順序のイメージから、さらに時間的な配列順序の始まりを表す意味拡張が見られる。中国語にはこのような派生義はないようである。例えば、例（19）の「宵の口」は夜になったばかりの頃を表し、例（19）の「秋の口」は秋になったばかりの頃を表す表現である。また、具体的な通路ではないが、時間的な配列順序の始まりとして認知し、

処理方法、手段の手がかりを表す派生が生じた。例えば、例（19）の「糸口」は巻いてある糸の先端のように処理方法、手段の手がかりを表す派生義である。それに対して、「手口」は悪事などを実行した時の方法・手段を表す派生義である。

（19）日本語：宵の口。秋の口。序の口。初口。先口。糸口。手口。

（九）「物を傷付ける、所持する能力」による派生義

大多数の動物の口腔には舌や歯などの付属器官を備え、食べ物の咀嚼や分断を補助するが、口は歯とともに、外敵に攻撃したり、噛み付いて身を守ったりして、武器のような役割を担っている。それゆえ､外敵に対する攻撃､物の把持を行う｢人や物を傷付ける能力｣、「物を把持する能力」という特徴に注目して、機能の類似性によるメタファーで､「～口」で武器の鋭い部位、及び道具を表現する。例えば、鳥類には歯がないので、歯による咀嚼の補助ができないが、硬い「口ばし」による攻撃、物の把持を行う機能を持つ。例（20）の「鳶口」は鳥類の「口ばし」のように攻撃する機能を持つ道具であり、例（20）の「オオマキの刃口」は貝を採る貝捲き漁の道具である。例（20）の「かんなの刃口」は木材の表面を薄く削り取り、滑らかな面に仕上げる工具の鋭い所である。即ち、動物の「物を傷付ける口」の派生義をさらに抽象し､｢口｣のような形ではなくても、刀剣の「人や物を傷付ける」機能だけに注目し、中国語の例（21）の〈刀口〉､〈刃口〉も「～口」で表現するようになる。また、動物が食べ物を噛み付く「口」の機能を派生して、中国語の例（22）の〈虎口〉は物の把持を行う手の親指と人差し指の間の窪みを指す名称である。

（20）日本語：鳶口（消防鉤)。オオマキの刃口。かんなの刃口。

（21）中国語：刀口。刃口。

（22）中国語：虎口（手の親指と人差し指の間の窪み）[11]。

[11] 日本語にも「虎口」という表現があるが、堀や土塁・切岸などの城郭の遮断施設の一部を開口させて、曲輪の出入り口を意味し、三・五節の派生義に属すると考えられる。

四、鄰接性によるメトニミーでの意味拡張

本節では基本義「口」から鄰接性によるメトニミーで意味拡張される多義構造を検討しようと思う。瀬戸（2007：P03－P11）の下位分類に従い、隣接性のタイプをさらに「空間隣接」、「時間隣接」、「特性隣接」の三種類に分けて、隣接性によるメトニミーの意味拡張を観察しようと思う。

（一）「口による人間や家畜計算」を表す派生義

生物が生きるため、食物を摂取し、呼吸をするには、口が大切な器官だと認知された。我々は「口」の特徴に注目し、目立った「口」を参照点（reference point）として、「部分－全体」という空間隣接によるメトニミーで、部分である「口」を全体である「人間」に喩える派生義が生まれる。特に「一人の人間には一つの口を持つ」という身体経験から、「口」を数えたら、「口」の所有者である人間を数えると同じように認知したので、目立った口を参照点として、「口による人間や家畜を数える」という派生義が生まれる。

（23）日本語：人口。

（24）中国語：人口。小倆口。一家三口。留活口。（三口猪）。單口相聲。對口相聲。

（二）「開口部位による容器計算」を表す派生義

三·三節でまとめたように、メタファーで「口」が物体容器の開口部位を表す派生義が生じた。部分である容器の目立つ開口部位を参照点として、「部分－全体」という空間隣接によるメトニミーで、容器全体を数える助数詞の用法が意味拡張された。

（25）日本語：井戸一口。釜一口。鐘一口。壷一口。

（26）中国語：一口井。一口缸。一口鍋。一口鼎。一口田。

（三）「刀剣類などの兵器計算」を表す派生義

三·九節で検討したように、動物の口は武器として外部に対する攻撃、物の把持を行うので、中国語ではその兵器の鋭い部位を参照点として、「部分－全体」という空間隣接によるメトニミーで、全体である刀剣類などの兵器を数える助数詞の用法が生じた。

（27）日本語：銅剣三百口が出土。太刀一口。

（28）中国語：一口剣。一口鋼刀。

（四）「金銭を取り扱う単位」を表す派生義

銀行で口座を開いたら、口座は口腔が食物を取り入れるように、金銭の出入ることを取り扱うという類似性で、口座は口腔のように「金銭を取り扱い処」と理解しても難しくない。そのイメージはさらに「容器－内容物」という空間隣接によるメトニミーで、「口」に一回納まる容量を申込金、寄付金及び出資金などの取り扱う単位に喩える派生義（例えば、例 29 の「一口」）が生じた[12]。

（29）日本語：一口千円の寄付。一口募金。

（五）「行き先、受け入れ先」を表す派生義

容器である「口」が食べ物を所持し、取り入れる特徴で、四·四節の「取り扱う所」からさらに意味拡張され、「容器－内容物」という空間隣接によるメトニミーで、就職先や、嫁入り先などを指す派生義が生まれる。

（30）日本語：就職口。勤め口。働き口。嫁入りの口。売れ口。

（六）「発話行為」を喩える派生義

人間の「口」は言葉を発する器官として、発話して意思を伝達するのが「口」の最も大きな役割なので、口の開閉という行為で、人間の発話行為という出来事を連想するので、言葉を口の発話行為の生産物と認識したら、「生産者―生産物」という時間隣接によるメトニミーで話者の発話行為を表す派生義が出てきた。例えば、例（31）の「早口」、「無口」、及び例（32）の〈口才〉、〈口碑〉の表現がそうである。この意味をさらに発展して、人間の発話態度を表す意味が生じた。例えば、例（33）の「悪口」、「口車」、例（34）の〈口氣〉、〈口風〉の表現がそうである。

（31）日本語：早口。無口。仲人口。口癖。口コミ。

（32）中国語：口才。口碑。口角。

[12] また、「口腔」を容器として、食べ物を口に入れる容量は、口腔で一回納まる容量や一回呼吸する動作の容量を計算する助数詞に意味拡張され、中国語の表現には〈喝一口水〉、〈鬆一口氣〉、〈反咬一口〉、〈混一口飯吃〉などがある。

（33）日本語：悪口。陰口。毒口。軽口。憎たれ口。無駄口。

（34）中国語：口氣。口風。

（七）「味覚評価」を表す派生義

人間の「口」は食物を摂取すると同時に、舌で味を分別するので、食べ物の味に関する感覚や好みも「～口」で表現する。「道具－結果」という時間隣接によるメトニミーで、人の味覚を基準にした「味覚評価」を表す派生義が出てきた。

（35）日本語：甘口。辛口。薄口。後口。油口。

（36）中国語：口味。口感。

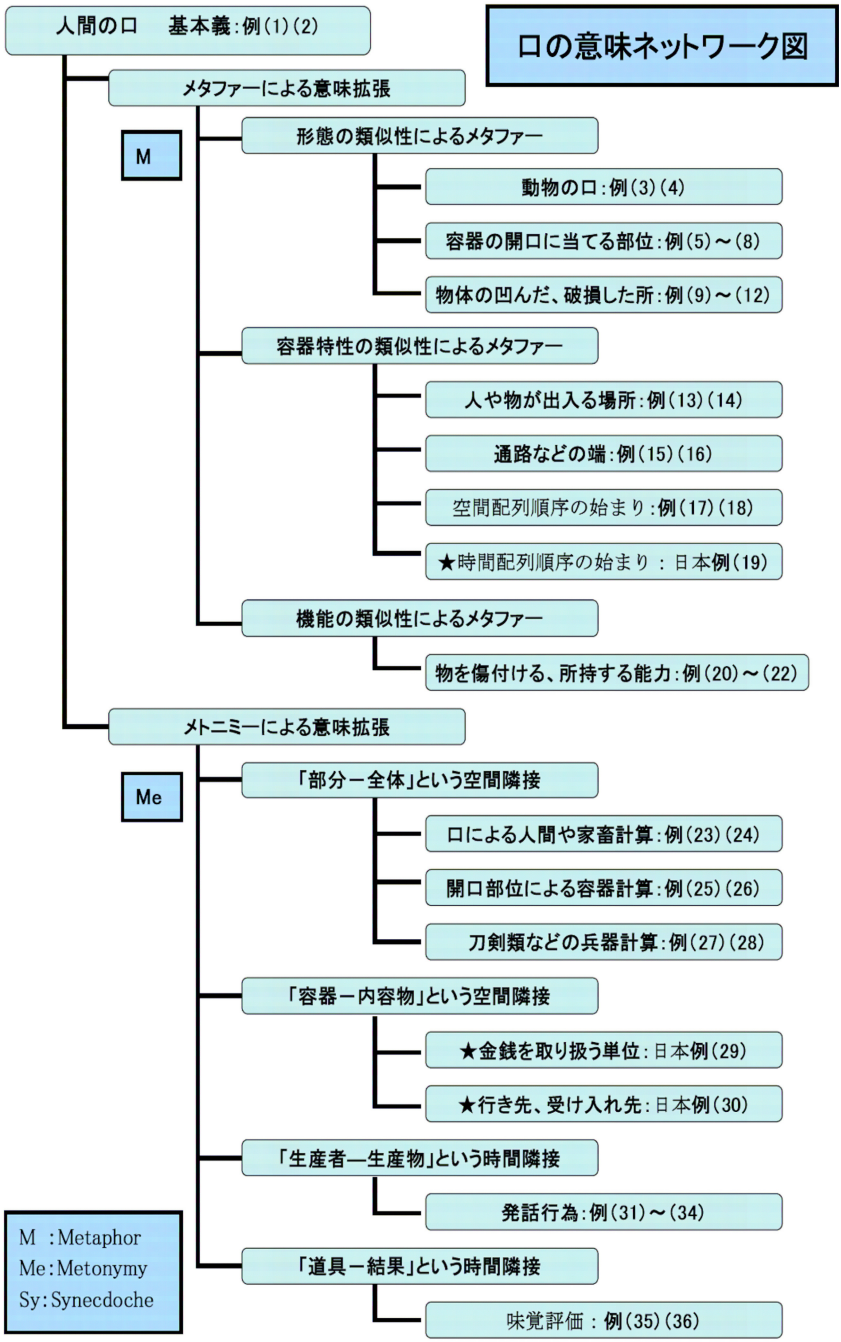
五、終わりに

本論では、日中両言語の身体部位語「～口」の多義構造を考察した。対照比較すれば、その相違点が以下のようにあげられる。（１）日中両言語はそれぞれ違った「口」の派生義が生じたが、人間の「口」に対する身体経験から得た認知的なイメージには普遍性が見られる。中国語の表現にはない「時間配列順序の始まり（宵の口、秋の口）」、「処理方法、手段の手がかり（糸口、手口）」、「金銭を取り扱う単位（一口千円の寄付）」や「行き先、受け入れ先（就職口、嫁入り口）」などを表す「口」の派生義が日本語の独特な用法である。それに対して、日本語の表現にはない「口の特徴による家畜を数える（三口猪）」を表す「口」の派生義が中国語の独特な用法である。（２）メタファーによる「口」の意味拡張は「容器特性の類似性」による意味拡張に集中しているが、メトニミーによる「口」の意味拡張は「容器」に認知された人間の口や物体の開口部位を参照点として、「容器-内容物」、「生産者-生産物」、「道具-結果」などの隣接性による意味拡張で受け入れ先や助数詞を表現することが特徴である。日中両言語の意味拡張による「～口」の派生義の相違点をまとめると、以下の表になる。

「～口」の意味拡張による派生義の相違点			
「～口」の意味拡張による派生義		日本語	中国語
メタファーによる意味拡張	人間の口（基本義）	○	○
	動物の口	○	○
	容器の開口に当てる部位	○	○
	物体の凹んだ、破損した所	○	○
	人や物が出入る場所	○	○
	通路などの端	○	○
	空間配列順序の始まり	○	○
	時間配列順序の始まり	○	×
	物を傷付ける、所持する能力	△	○
メトニミーによる意味拡張	口による人間計算	○	○
	口による家畜計算	×	○
	開口部位による容器計算	○	○
	刀剣類などの兵器計算	○	○
	金銭を取り扱う単位	○	×
	行き先、受け入れ先	○	×
	発話行為	○	○
	味覚評価	○	○

最後にその「～口」の多義構造を下の意味ネットワーク図にまとめる[13]。

[13] 多数の意義からできるだけ認知的な意味の関連性を発見し、少数の意義にまとめるのも意味ネットワークの意図である。瀬戸（2007：P03－P11）の意味ネットワーク図に従い、中心義から直接展開する意義を「主意義」と呼び、「主意義」から派生する意義を「副意義」と呼ぶ。「副意義」をさらに派生する意義がある場合は「プラス義」と称する。多義語の全体は、中心義から最大三段階の深度で記述する。


口の意味ネットワーク図
人間の口　基本義：例(1)(2)
メタファーによる意味拡張
M
形態の類似性によるメタファー
動物の口：例(3)(4)
容器の開口に当てる部位：例(5)～(8)
物体の凹んだ、破損した所：例(9)～(12)
容器特性の類似性によるメタファー
人や物が出入る場所：例(13)(14)
通路などの端：例(15)(16)
空間配列順序の始まり：例(17)(18)
★時間配列順序の始まり：日本例(19)
機能の類似性によるメタファー
物を傷付ける、所持する能力：例(20)～(22)
メトニミーによる意味拡張
Me
「部分－全体」という空間隣接
口による人間や家畜計算：例(23)(24)
開口部位による容器計算：例(25)(26)
刀剣類などの兵器計算：例(27)(28)
「容器－内容物」という空間隣接
★金銭を取り扱う単位：日本例(29)
★行き先、受け入れ先：日本例(30)
「生産者―生産物」という時間隣接
発話行為：例(31)～(34)
「道具－結果」という時間隣接
味覚評価：例(35)(36)
M ：Metaphor
Me：Metonymy
Sy：Synecdoche

参考文献

赤祖父哲二（2000）『日中英言語文化事典』マクミランランゲージハウス。

有薗智美（2005）「身体部位（「手」、「口」）を含む慣用表現の意味分類」『日本認知言語学会論文集第 5 巻』P487-497。日本認知言語学会。

許穎欣（2007）「漢語“口”的隱喻認知機制研究」『杭州電子科技大學學報第 3 卷第 3 期』P33-P37。杭州電子科技大學。

国広哲弥（1994）「認知的多義論－現象素の提唱－」『言語研究 106 号』P22-44。日本言語学会。

国立国語研究所編（2009）『辞書を知る』ぎょうせい

小西友七ら（2006）『ジーニアス英和辞典 第 4 版』大修館書店

呉宏（2008）「人體詞“口”在日語慣用語中的語義擴展」『日語學習與研究 2008 年增刊』P10-P13。日語學習與研究雜誌社。

古敬恆（2000）『人體詞與人的秘密』團結出版社

史錫堯（1994）「“口”“嘴”語義語用分析」『漢語學習第 1994 年第 1 期』P011-014。延邊大學出版社。

瀬戸賢一（2005）『よくわかる比喩』研究社

瀬戸賢一（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館

曹逢甫（2001）『身體與譬喻 語言與認知的首要介面』文鶴出版社

田中聰子（2002）「「口」の慣用表現―メタファーとメトニミーの相互作用―」『言葉と文化 第 3 巻』P05-P20。名古屋大学大学院国際言語文化研究科。

田中茂範（2006）『E ゲット英和辞典』ベネッセコーポレーション

辻幸夫（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社

張建理（2004）「英漢多義詞異同研討：以“臉、面”為例」『英漢語言文化對比研究（1995-2003）』P213-P227。上海外語教育出版社。

松本曜（2000）「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張―その性質と制約」『認知言語学の発展（坂原茂編）』P295-P324。ひつじ書房。

籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社
籾山洋介・深田智（2003）「第 3 章 意味の拡張」『認知意味論』P73-134。大修館書店。
森田良行（1994）『基礎日本語辞典　第六版』角川書店
ラダンポー・サイソンブーン（2008）「身体部位「口」の意味拡張：日本語とタイ語の比較を中心に」『日本認知言語学会論文集第 8 巻』P12-22。日本認知言語学会。
李臻儀（2002）「中文肢體部位詞的語意演變」行政院國家科學委員會補助專題研究計畫成果報告。NSC 89-2411-H-003-066-。

用例の出典

国立国語研究所（2004）『分類語彙表　増補改訂版』大日本図書
小西友七ら（2006）『ジーニアス英和辞典 第 4 版』大修館書店
佐藤憲正ら（2001）『日本国語大辞典第二版』小学館
瀬戸賢一（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館
田中茂範（2006）『E ゲット英和辞典』ベネッセコーポレーション
羅竹風ら（1997）『漢語大辞典』東華書局

青空文庫：http://www.aozora.gr.jp/
教育部重編國語辭典修訂本：http://dict.revised.moe.edu.tw/
現代漢語平衡語料庫：http://www.sinica.edu.tw/SinicaCorpus/index.html
GOOGLE 中国語版：http://www.google.com.tw/
GOOGLE 日本語版：http://www.google.com/intl/ja/
三省堂 Web Dictionary：http://www.sanseido.net/
『説文解字』のオンライン版：
http://shuowen.chinese99.com/index.php?action=displaychar&num=779